松本清張

黒革の手帖・上

新潮社

松本清張

黒革の手帖

上

新潮社

黒革の手帖（くろかわ てちょう） 上

昭和55年6月25日発行
昭和55年8月25日6刷

著者　松本清張（まつもと せいちょう）

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

東京都新宿区矢来町71　〒162

電話業務部(03)266－5111
編集部(03)266－5411

振替東京4－808番

印刷　錦明印刷株式会社

製本　新宿加藤製本株式会社

© Seicho Matsumoto, 1980, Printed in Japan

乱丁，落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 980円

黒革の手帖 上

装

帧

上

原

徵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

「クラブ・燭台」は銀座の並木通りを土橋近くへ歩く横丁で、このへんに多いバア・ビルの一つにあった。五階まで全部クラブとかバアとかの名のつく店で占められていた。

ママの岩村叡子は大柄な、丈の高い女で、けっして美人ではないが、あっさりとした愛嬌がある。三十四、五くらいで、鼻の先が少し上向いている。頭の回転も早い。開店して十年以上になるが浮沈の多い銀座の世界では人なみ以上の経営才能を要する。女の子が三十人くらいで、半分以上入れ替えがかなり激しい。

十一月のある晩、画描き仲間が三人寄った。

向うのテーブルに顔の小さなホステスがついている。小紋の肩も胴も細い。こちらから眺めても三十を二つか三つは出ているように思われる。

「あのひと、新顔だね？」

「はい。ハルエさんというの」

画家Aの視線に瞳を合わせた千鶴子というのが教えた。

「半月前からよ」

Aがハルエという女を煙草の煙の中でときどきそれとなく観察すると、なんだかぎこちないと

ころが見える。前から居る女たちが客とふざけていても、ハルエは上体を棒のようにして坐っていた。顔では精一杯の愛想笑いをしていたが。

画家のテーブルの前が店内の通路で、そこを往復するハルエの姿も脚の運びも馴れていなかった。バアにはまったく経験のない素人で、それがはじめてこの仕事についたという感じだった。客の前をうつむいて歩く。

通路の間接照明の中で見るその横顔は、額がやや広く、眼は小さく、頬がすぼんでそこに黒い影が溜っていた。痔せているので姿勢はよく、小紋の着物も似合うが、帯の上の胸は真直ぐで、ふくらみはあまりなかった。テーブルにつくと横のフロアスタンドの光に顔の陰影は少なくはなるが、ひろい額や張った顴骨が光る。どうみても色気のある顔ではなかった。

客も、馴染のうすいせいもあって、そのハルエにはあまり眼をむけず、まわりの若い女の子とばかり話したり笑ったりしていた。そこには他の女たちとの年の違いや、場の不馴れがはっきり出ていた。

だが、彼女は、熱心に客と若い子らのやりとりなどの様子に見入っていた。それが画家の注目をひいたのである。

ママの叡子がよそのテーブルから回ってきて、その大柄な身体をAの横に置いた。

「あのハルエさんというのは、ママの友だちということだね」

Aは話の間できいた。

「そうよ」

大きな眼をそっちへむけて軽くうなずいた。

「昔の仲間？」

「ううん、ちがうわ」

頸を振って、
「ズブのシロウトよ」
「やっぱりね」
「様子でわかるでしょ？」
「そりゃ、わかる、じゃ、幼な友だち？」
画家の眼でハルエを眺めつづけていた。彼女はやはり客らの会話に口もはさまずに微笑していた。
「でもないわね。高校時代の同窓生よ」
まわりの女の子を気にして叡子は小さく云った。
「へえ。そんなの、いまだにつきあいがあるのか？」
「ずっとつき合ってたわけじゃないけど。……二カ月前にとつぜんわたしを訪ねてきて、この店で働かせてくれとたのむもんだから」
「そうすると……未亡人か？」
夫に死なれ、子供をかかえた女がAの頭に浮んだ。
「どうしまして。独身よ」
「ほう」
三十の半ば近くまで独身でいて、いまになってバアで働きたいというのは男に捨てられたのか。Aは、またそっとハルエの顔をそこから見遣った。
「ほんというとね、あのひと、昼間はあるところに勤めているのよ。そこには、もう十五年以上も。学校を出るとすぐ」
Aの空想がまた違った。

「へえ。そんなに長く勤めていて、今ごろになって夜のアルバイトをしなくちゃならんというのは……わかった、若い恋人への世話かね？」
飲んでいる仲間もまわりの女の子も含み笑いをした。
「でもないようね」
「はてな」
「ハルエさんはね、この商売をやりたいらしいわ。そのために見習いに来ているのよ」
「なるほど、そうだったのか」
そう聞かされると合点がゆく。場馴れしない固い様子と、熱心にホステスたちのサービスぶりを見つめている姿。未経験者がバアを開くための「見習い」なのだ。画家はまた彼女へ眼をむけないわけにはゆかなかった。
「そうすると、十五年以上もつづけた昼間の勤めのほうはやめるわけか？」
「もちろんよ。女は何十年つとめてもそこではウダツが上らないわ」
「そりゃ、そうだ。女の職場は男にくらべて不合理にできている。ところで、彼女はどこに勤めているの？」
「それは云えないわ。まだやめてないんだから。でも、カタイ勤め先よ」
「そうか。そういうカタイ勤め先からバア転業とはめずらしいね。よっぽどいいスポンサーがついたとみえるな」
「いえ。そういうひとは居ないそうよ。自力で店を開くと云ってるわ」
「どこで？」
どうせ新開地のような場所だろうと思っていたので、
「この銀座で」

という返事に、Aは意外だった。
「それじゃ資金がたいへんだろう。スポンサーがいないというのを額面どおりうけとると、彼女は相当金を貯めたらしいな。それとも金持ちの伯父さんの遺産でも転げこんできたのか」
「知らないわ。けど、店は店でも、店の規模によるわ。カウンター式のスナック・バアにしてお客がいっぱい詰って二十人ぐらい。ビルのそういう狭い場所を借りて、バーテンもホステスも置かなければ、安上りにできるわよ」
「ズブのシロウトの彼女がシェーカーを振ったり、ひとりでお客にサービスしたりするのか？」
「小さなスナック・バアくらいなら、お客さまからそうむずかしい注文はないし、シロウトでも見よう見真似でシェーカーぐらいは振れるわ。ウチに居た子で、そういう店を開いているのが二、三人はいるから」
上背のある恰幅のいい五十年輩の客を先頭にして三人連れが入ってきた。マネージャーとボーイがさっそく席をつくった。この店はいつも混んでいる。新しい客が坐ったのは画家の斜め前で、ハルエのいるテーブルの隣だった。先客らは片隅へ追い込まれた。
ママの叡子がついとAの傍をはなれ、半白頭の肥った紳士の前へ行き、愛想まじりにていねいな挨拶をした。ほかの席にいた女の子ら四、五人がマネージャーの眼顔でそのテーブルに移動して集った。先生、先生、と口々に云っていた。
センセイといわれている一人のAは、傍の千鶴子に、だアれ？　と低声できいた。
「楢林さんといって産婦人科の病院長よ」
千鶴子は下をむいて教えた。
「いままで見かけなかったね。最近かい、ここへ見えるようになったのは？」
「三カ月ぐらい前からかしら」

赧ら顔のその客は、眼鏡をはずしてお絞りで鼻のわきを拭きながら、マネージャーにオーダーを云い、まわりの女の子にも好きな飲みものをとるように云った。
「いいお客のようだな」
「そうね。わりと派手ね」
ママがすぐにそこへ行くはずだった。
「お医者にはかなわない」
税金の特別控除率のことがつい口から出た。モテる客への皮肉とも悪態ともなった。
「帰ろうか」
十時すぎである。画家たちには、このへんが引きあげどきだった。
エレベーターの乗り口まで千鶴子やトシエがついてきたが、そのうしろに小紋の着物が立っていた。彼女を話題にしたせいで、見送りは叡子の指図らしかった。
Aは黙ってもいられない気がして、そのほうへ二、三歩引きかえし、
「君のこと、ママから聞いたよ」
と笑いながら云った。
「ハルエと申します。よろしくおねがいします」
精いっぱいの愛嬌をうかべ、鄭重に腰をかがめた。距離が近いし、すぐ上に明るい電灯があって、彼女の美人でない顔がはっきりと見えた。
おじぎする姿態も硬く、ママは昼間はカタイ勤めをもっていると云っていたが、まるで役所か鉄鋼会社の女事務員のようであった。

一カ月ほど経った。Aは、所用があって午前中から千葉県の富津に住んでいる友人の版画家を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

訪ねた。昼飯をいっしょに食べながら一時間くらい雑談し、帰りかけると千葉市の銀行に用事があるから自分の車で千葉駅まで送るという。

途中の道路が混み、千葉市内に入ったとき三時十五分前だった。

「これは困った。駅まで君を送ってたんじゃ銀行が閉ってしまう。わるいけど、銀行へ先に寄らせてくれんか」

Bは版画家として早くから名を知られ、その作品も高価に売れている。銀行にはあまり縁のない普通の画描きとは異っていた。

「いいよ、ぼくはべつに帰りを急がないから」

版画家が車をつけたのが銀行の横にある駐車場だった。三階建の白い建物の正面には、東林銀行千葉支店の彫刻文字がならんでいた。

正面をはいると、ひろい客溜りを隔てて横いっぱいにカウンターがあり、二十人ばかりの男女の行員が執務していた。壁の大時計は三時十分前をさしている。かなりの客がカウンターの前や花などを飾ってある客待ちのロビーに坐っていたが、駆けこんでくる客も少なくなかった。版画家がカウンターの前に行っているあいだ、Aは客待ちの椅子にかけてはじめて入ったこの銀行を、時間つぶし半分に眺めていた。

どこの銀行でも同じようにいちばん奥の正面寄りに支店長がこっちむきに大きな机に坐っていた。その前の横むきの机が次長席といったところだろう。現金収納係の窓口には、若い女が横一列にならんでいる。ここの女子行員の制服は、ベージュ色のワンピースで、襟と袖口は臙脂色、胴は黒の細いベルトで締めていた。行員らの動作は静かな中にきびきびしていて、その習性的な律動感は見た眼にも快い。

Aがカウンターの窓口からすこし奥まったところでかたまっている机に眼をむけたとき、彼は

思わず眼をみはった。その机の一つに横むきにイスにかけている女の顔が、一カ月前に見た「クラブ・燭台」のハルエに似ていたからである。

その女子行員は机の書類に書き入れしたり判を捺したりしている。画家は眼を擦る思いで、こっちから何度も見なおしたが、その横顔の輪廓といい、姿勢といい、酒のテーブルに坐っているハルエそっくりであった。ベージュのワンピースの制服を、地が紺でそれに白や黄や赤のこまかい文様を散らした小紋に替えさせるとハルエがそこに居るようである。

Aはなおもロビーから彼女を見つめた。おでこの額といい、頬の張ったかたちといい、痩せた肩の動かしかたといい、もう間違いなく「燭台」のあの女であった。顔が店で見たときよりも少し年上にうつるのは昼間の銀行と夜のバアの違いであろう。

彼女のほうは横むきだし、仕事に心をとられているので、彼の存在には気づかない。画家は呆れる思いで見ていたが、そのうち、ママの叡子が云っていたハルエは「昼間のカタイお勤め」という言葉につき当った。あれは銀行勤めのことだったのか。

それにしても、昼は千葉の銀行員、夜は銀座のクラブのホステスとは、思い切った両刀使いだ。ここの銀行の行員たちも彼女の夜を知ってはいないだろう。「ハルエ」というのも「燭台」での名前で、本名ではあるまい。もっとも彼女のホステスはアルバイトではなく、近くバアを開く準備で、「燭台」には一カ月半前に出たばかりだというから、まだここの行員らに気づかれるところまではいたっていないかもしれない。バア開店となれば、二つの仕事はもう兼ねられないから、銀行をやめるつもりだろう。

版画家がカウンターから戻ってきた。Aは彼にこっそりとハルエのほうを眼顔で教えた。

「なんだ、あの女子行員がどうかしたのか？」

駐車場の車に乗ってから版画家が訊いた。

「どこかで見たことのある女性と思うけど、あの女子行員はこの銀行にもう長いのかね？」
「原口さんのことだな。ああ長いね。もう十五、六年ぐらい勤めているんじゃないかな。だからベテランでね。預金係をしているけど、お客さんもだいぶんついているらしい。長く勤めて信用があり、仕事が切れることで評判だ。もっともどこの銀行支店でも、そういうベテランの女子行員が一人や二人は居るものだがね。……原口さんがどうかしたのか？」
「いや、見たようなひとだと思って訊いたまでだ。原口なんという名かね？」
「たしか原口元子とか云ってたな」
「ハルエ」というのはやはり「燭台」での通称でいわゆる源氏名であった。
「原口さんは結婚しているのか？」
「いや、まだ独身ということだ。勤めが面白くて適齢期をのがした組だな。なんだ、いやに彼女のことを気にしてるようじゃないか？」
「ちょっとね。……ぼくがこんなことを訊いていたなどと彼女には云わないでくれ」
「わかってるよ」
版画家はAの顔をじろりと見た。

半月後、富津から版画家がAに電話をかけてきた。
用件の話が終ったあと、
「それはそうと、今日、千葉の東林銀行に行ったらね、この前君が訊いていた原口元子は二週間前に銀行を退めたということだったよ」
と話した。
「ほう、ほんとうか」

Aは、つい軽いおどろきの声を出した。
「なんだ、君は原口元子を前から知っていたのか？」
版画家が聞き咎めた。
「いや、そういうわけじゃない。あのとき、ぼくが前にどこかで会ったひとに似ていたから訊いたんだけど」
早晩、原口元子が銀行をやめるだろうとは予想していた。昼と夜の二つの仕事がそういつまでもつづけられるものではない。
いったい銀行側は彼女がバアを開くことを知っているのだろうか。興味があるので、
「あの女性は長く勤続していたということだったが、退職は結婚のためかね？」
と、さぐりを入れてみた。
「ぼくも前から彼女とはあそこで顔を合わせていたからね、それで窓口の若い女に君と同じことを訊いたんだ。すると、その女は、知りません、と答えるんだな。原口元子は窓口の女子行員らの先輩だ。それが結婚のために退めたかどうか知らないという返事もおかしなものだ」
元子の退職理由がバアの新経営とは客に云いにくいので、先方では知らないと答えたのかもしれない。銀行は固い商売である。
「ぼくの預金口座を担当している男の行員が居たから、その男に訊いたんだ」
「うむ、うむ」
「すると、彼も彼女が退めたのは結婚の準備かもしれないが、当人が何も発表しないのでそれはわからないと云うんだね。退職願には、家庭の都合により、とあったそうだ」
それは銀座でバアを開くためだよ、とAはよほど口に出しかかったが、版画家がつづけて云った言葉でそれを引込めた。

「どうも原口元子の退職には何か事情があるらしいよ。それもあんまりいいことではなくてね。それを銀行側が隠しているようなふしがみえる。でなかったら、窓口の女の子も男子行員も曇った表情で曖昧なことを云うはずはない。これはぼくの想像だが、原口元子はあの銀行をクビになったのかもしれないね」

「クビ？」

バアを開くために「燭台」で「ハルエ」というホステスになっているのが上司に露見して退職を云い渡されたのだろうか。

もしそうだとすると、いくら固い銀行でもすこしひどすぎる。バアのホステスという風俗営業のアルバイトが銀行の体面を汚したとでもいうのだろうか。

もっとも原口元子もその計画でいるのだから、銀行をさっさと辞めたのち「燭台」へ修業に出れば進退がすっきりするのに、未練がましく自分のバアの開店まで銀行にへばりついているのがよくない。女は計算にこまかいから、辞める最後の最後まで給料を稼ごうというつもりだったかもしれぬ。

だが、それにしてもクビとはひどい。長らくつとめていた女子行員へのやりかたではない。

やはりバアのホステスというのが堅実な銀行員の「良俗」になじまないために労組もまた原口元子のクビを黙認したのだろうか。

「君はまたイヤにあの女子行員に興味を持つじゃないか」

友人の版画家はひやかし半分に云った。

「そういうわけじゃないけどな」

原口元子がホステスをしていると打ちあければ版画家も少しはおどろくだろうが、それはまだ口に出せなかった。もうしばらく様子を見た上でである。

「君がそんなに気にかかるのだったら、そのうち銀行の者に彼女が退めた事情を聞き出して君に知らせるよ」

版画家はやはり笑いながら云った。

「そうだね、もしついでがあったら」

Aはわざと気のない答え方をした。版画家から妙にカンぐられても困るのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.